

「JF 日本語教育スタンダードの試行を通じた初級講座シラバスの見直し —講師の協働によるコース改善—」

国際交流基金ケルン日本文化会館
三矢真由美

キーワード：チームティーチング、ケルン・シラバス、講師の協働、Can-do 目標

1. 背景と目的

1.1 ケルン講座の概要

ケルン日本文化会館の日本語講座（以下、ケルン講座）は、開講約 40 年の歴史を持つ、一般社会人を対象とした講座である。学習者層は、社会人、年金生活者、高校生、大学生など多様である。主な学習目的は、「日常会話の習得」「マスメディアが提供する情報の理解」「日本文化に関する一般的な知識の習得」「日本語学習自体を楽しみとして」で、「仕事や留学で日本で生活するため」という学習者は少ない。現在では入門（レベル 1）から上級（レベル 9）までの 9 レベルを提供しており、そのうちレベル 5 までを初級としている。初級の主教材は『みんなの日本語』と『Basic Kanji Book』である。上級レベルを除く各レベルで、日本語非母語話者と母語話者のチームティーチングによる授業を実施している。

1.2 近年の試みと課題

ケルン講座はその時々状況を踏まえ、これまで様々な見直しや試みを行ってきた。近年の試みとして挙げられるのが、2002 年に、初級の主教材を『みんなの日本語』に変更し、コミュニケーション能力の育成を目指したカリキュラムを策定したことである。しかし、この新シラバスは、機能、場面、話題などコミュニケーション上の目標を意識してはいるが、ここで提示されたのは日本の生活を想定したコミュニケーション場面が中心で、ケルン学習者の言語使用を踏まえたものであるとは言えなかった。この点を改善するため、2008 年には JF 日本語教育スタンダード（以下、JF スタンダード）試行の中で CEFR の能力記述文（以下、CEFR の Can-do）を参照し、Can-do の形でケルンの環境での言語行動目標を策定した。現在これに基づいたシラバス（以下、ケルン・シラバス）で授業を実施している。（国際交流基金、2009）

コミュニケーション上の目標を意識した授業活動を設計、実施していく場合、講師の経験の長さ、言語学習や教授法に対する考え方などが大きく影響するため、講師によって授業活動の内容に大きな差が出ることがある。ケルン講座においても同様の問題が見られる。コミュニケーション能力を育成するための実践をより効果的に行うためには、意識の共有だけでなく、講師間で教育実践を共有していくことが必要である。

以上、講座のこれまでの歩みと現状を概観した。そこで、次の 2 つが講座の課題として挙げられてきた。

課題1：ケルン・シラバスの妥当性の検証

課題2：講師間での教育実践の共有

1.3 本発表の目的

本発表では、課題1・2をふまえ、「JFスタンダードの提供するCEFRのCan-doを参照して策定したケルン・シラバスの言語行動目標（以下、Can-do目標）がケルンの学習者への日本語教育に合ったものなのか」「シラバスの見直しが講座や講師にどのような影響を及ぼしたか」について調査した結果を報告する。さらに、経験や考え方、母語の違いを越え、講師間で教育実践を共有し、共通の認識を作り上げていけるようなチームティーチングのあり様について探ることとする。

2. 方法

2.1 シラバスの作成、試用、見直しの手順（表1参照）

シラバスの作成、試用、見直しはレベル1～5の担当講師（派遣専門家のベ3名、非常勤講師のベ11名。以下、各コースを担当した講師は派遣専門家・非常勤講師を問わず「担当講師」と呼称する。）により、以下のような手順で行われた。

時期	講座見直しの手順	内容
2008年4月	学習目標策定	レベル1～5のCan-do目標を作成
2008年10月	冬シラバス作成	目標を『みんなの日本語』の課に振り分け 学習項目を各目標ごとに振り分け
2008年11月	冬シラバス試用	
2009年3月	調査1	目的：冬シラバスの問題点を探る 方法：・授業記録分析 ・講師インタビュー
2009年3月	シラバス見直し	上記調査の結果をもとに冬シラバスの見直し
2009年3月	夏シラバス作成	
2009年4月	夏シラバス試用	
2009年7月	調査2	目的：シラバスの見直しが講座に与えた影響を探る 方法：・授業記録分析 ・講師インタビュー

表1 シラバスの作成、試用、見直しの手順

(1) Can-doによる学習目標策定（2008年4月）

レベル1から5の担当講師9名がケルンの学習者を考慮したCan-do目標を作成した。

(2) 冬シラバス作成（図1参照）

(1)で作成したCan-do目標を、派遣専門家が『みんなの日本語』の中で最も該当する課に振り分け、各課の目標とした。次に、目標を達成するために必要な学習項目を

振り分けた。学習項目としては該当課の主要項目が入るほか、以前学習した項目で、その目標を達成するために役立つと思われる項目を「リサイクル項目」として提示した。

目標:
相手にはっきりゆっくり話してもらえ、かつ、助け(繰り返し、修正、言い換えなど)が得られるような状況であれば、ごく基本的なあいさつや非常に簡単な自己紹介、自分や家族、日常生活など身近なことに関して理解でき、自分でも表現できる。

言語行動目標					学習項目				評価など				
聞く	読む	やり取り	表現	書く	文法項目	語彙・表現	リサイクル項目	社会・文化的知識	語	読	聴	口	作
	駅・店・看板などで、商品の値段が読める				数字(3) 助数詞: 円(3)								
	映画・イベントのポスター・ちらしなどの日付、曜日・タイトル・値段などが理解できる				日付(5)、時刻(4)、曜日(4)、数字(3)、助数詞: 円(3)								
誕生日・日付などの時の表現が聞いて理解できる					日付(5)			日付の読み方(月と日の順番)					
		ものがどこにあるか尋ねられて、また答えられる			こそあど: 場所(3) N1はN2(場所)です(3) 助数詞: 階(3) います、あります(10) 助詞: あそこに(10) 助詞: 写真が(10) 位置の表現(10)	すみません		階の数え方					
		店で値段などを尋ねて、ほしいものを買うことができる			数字(3) 助数詞: 円(3)、階(3)	すみません ～を見せてください。 じゃ、これをください。		店員の決まり切ったあいさつには普通反応しない 階の数え方					

図 1 2008 年 冬シラバス (レベル 1) の抜粋

(3) 冬シラバスの試用 (2008 年 11 月～2009 年 2 月)

2008 年冬コースでシラバスを導入した。担当講師には授業を実施してもらいながら次の 2 点の検討をお願いした。1 つ目は Can-do 目標が達成可能なものか、あるいは妥当なものかについての検討である。2 つ目は、Can-do 目標を達成するために教科書以外の言語項目 (文法項目や語彙など) で必要な項目や、目標との関連が不明瞭な言語項目の検討である。担当講師には、授業内容や問題点や気づいた点を授業記録フォームに記入してもらった。

(4) 調査 1

シラバスの問題点を探り、見直しにつなげるため、授業記録の分析や講師へのインタビュー調査を実施した (2.2 を参照)。

(5) 冬シラバス見直し、夏シラバス作成、試用 (2009 年 3 月～6 月)

上記の調査結果をもとにシラバスの見直しを行い、夏シラバスを作成した。夏シラバスは 2009 年夏コースで試用された。

(6) 調査 2

シラバスの見直しが講座に及ぼした影響を調べるため、授業記録の分析や講師へのインタビュー調査を実施した (2.2 を参照)。

2.2 調査

(1) 目的

調査は 2008 年冬コース終了時 (2009 年 3 月) と、夏コース終了時 (2009 年 7 月) の 2 回行った。調査の目的は以下の 2 点である。

目的1：シラバスの問題点を探り、シラバスの見直しにつなげる。

目的2：シラバスの見直しが講座にどのような影響を及ぼしたのかを探る。

(2) 方法

調査は具体的には以下の方法を用いて行われた。

① 授業記録分析（調査1、2）

シラバスと授業記録を照らし合わせ、担当講師が授業中実際に行った活動、シラバスに加えられた変更点などを拾った。

② 講師インタビュー（調査1、2）

日本人専任講師（発表者）1名およびドイツ人客員講師1名が質問者となり、担当講師に直接あるいは電話で行った。Can-do 目標に基づく授業について、コースの目標設定について、などを聞いた。

3. 結果

3.1 シラバスの問題点と見直しについて

(1) シラバスの問題点（表2参照）

調査の結果、シラバスの問題点として、次の4つがあることがわかった。

① 学習者の日本語能力に合わない目標

特に「書く」目標と「読む」目標は学習者の能力よりも高い目標であると講師が感じた Can-do 目標が多かった。

② ケルンの学習者のコンテキストに合わない目標

日本でしか遭遇することのないような Can-do 目標が挙げられた。

③ 特定の課に割り振れない目標

特に、文字や表記に関係した目標である。

④ 目標との関連が不明瞭な項目

言語行動という視点から見ると、こういった行動と関連があるのか不明瞭な項目が指摘された。このような文型や項目は、特定の行動目標を達成するために不可欠な項目にはなりにくく、むしろ表現を豊かにするのに貢献していると考えられる。

(2) シラバスの見直し案

以上、調査1の結果明らかになった問題点を、2009年3月に次のように見直した。

① 学習者の日本語能力に合わない目標

Can-do 目標を学習者のレベルに合わせた。例えば、Can-do 目標に「ごくやさしい日本語で書かれた・・・」などの制約をつけたり、レベル1ではひらがなは読み書きを目標とするがカタカナは読みだけを目標とするなど、受容と産出の重みづけを変えた。

② ケルンの学習者のコンテキストに合わない目標

直接体験的な目標は間接体験的なものに直すなど、Can-do 目標をケルンのコンテキストに合わせた。例えば、必要な情報を得るという目標の場合、自分で直接情報を入手するのが日本のコンテキストであるなら、海外では友達や先生を通して必要な情報を得るといほうが現実的な目標になりうる。

③ 特定の課に割り振れない目標

文字・表記に関する目標をどのように扱うのかに関しては今後の課題として残った。ひらがなとカタカナに関して言えば、これだけで Can-do 目標を作るのは無理があるだろう。漢字については、Can-do 目標に沿ってある程度のカテゴリー化はできそうである。しかしそのためには、現行の漢字教材を変更しなければならないという現実的な問題がある。

④ 目標との関連が不明瞭な項目

Can-do 目標は学習レベルによってすべて異なったものであるとは限らない。同じ目標を下のレベルであればごく簡単な表現や文型を使って達成することを目標にすればよいし、上のレベルであればさらに複雑で丁寧な表現を使って達成することが可能である。そこで、目標との関連が不明瞭な項目は無理に具体的な Can-do 目標に入れ込まず、抽象的な記述のまま「表現を広げる」という Can-do 目標に入れた。

問題点	Can-do 目標、学習項目の例
学習者の日本語能力に合わない目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 申込書などに名前や年齢などが書ける (レベル 1) ・ 旅行、日常生活についての短い手紙やメールを理解する (レベル 2) ・ 物事についての簡単な説明書を読んで概要を理解できる (レベル 4)
ケルンの学習者のコンテキストに合わない目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 不動産屋で日本の住まいについて簡単な情報を聞いて理解できる (レベル 3) ・ 旅行会社の窓口で旅行について情報を得ることができる (レベル 4)
特定の課に割り振れない目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知らない言葉でも音を聞いて表記することができる (レベル 2)
目標との関連が不明瞭な項目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 連体修飾節 (レベル 3) ・ 「～かどうか」 (レベル 4) ・ 「疑問詞+か」 (レベル 4) ・ 「～ようです (様態)」 (レベル 5)

表2 冬シラバスの問題点

3.2 見直しが講座に及ぼした影響

ここではシラバスの見直しが講座に及ぼした影響について、インタビュー調査の結果、明らかになったことを述べる。

(1) 視点、意識の変化

以前は Can-do 目標と学習項目を別のもので見ている講師も少なくなかったが、シラバスの見直しを通して、Can-do 目標と学習項目の関連をより意識するようになったと感ぜられる発言が見られるようになった。次のような発言から、講師が教科書の項目をそのまま教えるのではなく、「この項目はこの目標を達成するために必要か」、「あとどんな項目を追加すれば、この目標が達成できるのか」など Can-do 目標を中心に学習項目を考えるようになったことがわかる。

- ・ Can-do 目標を達成するという視点で考えれば教科書の項目はもっとカットできる。
- ・ Can-do 目標に沿って授業を考えるようになった。
- ・ 言語の形と機能のつながりが前よりは見えてきた気がした。

さらに、Can-do 目標と学習項目の関連を意識するようになるにつれ、Can-do 目標に基づく授業に対する発言がより具体的でポジティブなものに変化していった。例えば調査1のインタビューでは「この目標は時間がなかったからできなかった」、「この目標は難しすぎる」など、ネガティブな面を見る傾向があったが、調査2のインタビューでは「〇〇という項目を追加すれば、こんな Can-do 目標もできるようになる」など、問題を克服しようというポジティブな姿勢が見られるようになり、そのために何をすればいいのか具体的な解決策を提示するようになった。

(2) 評価法

ケルン講座では、以前から担当講師が文法、文字・語彙、聴解、読解、作文のテストを作成し、コースの最後に実施してきた。JF スタンドアードの試行と合わせて、2008 年夏コースから口頭テストも開始した。JF スタンドアードの取り組みの中で、Can-do 目標に基づいた授業に対し、講師の意識が着実に変わりつつある一方で、それを授業活動として具現化する難しさを感じていることがわかった。その原因として挙げられたのは、まず、評価法が大きく変わっていないことである。しかし文法に関しては、正確さを測るために従来のような試験が妥当ではないかという意見もある。

- ・ 試験が授業活動をどの程度反映できるかは今後の課題。筆記試験も Can-do 目標と合わせて作成していかなければならない。出口である試験を変えないと今以上に授業は変わらない。
- ・ 文法の正確さを Can-do という形式で測ることはできない。文法の試験は今のままで、それをどう使うかを口頭試験で測ればいいのかではないか。

(3) チームティーチングの課題

1 クラスを 2 人の講師が担当していることも、Can-do 目標に基づく授業の実践に影響を及ぼしているようである。講師間の意識のずれ、あるいは引き継ぎの時間が取れないといった現実的な問題もある。

- ・ 担当者との意見のやり取りが難しい。意見があっても相手に対して否定的なコメントは言いにくい。
- ・ Can-do 目標に基づいた授業だと、教科書にないものを足したり省略したりするので、講師の引き継ぎが少し難しくなる。

(4) 授業計画

Can-do 目標に基づくシラバスで授業を組み立てることで、授業の焦点が定まったという意見もあった。

- ・ 目標を掲げたことで授業にメリハリが付き、各活動の時間配分がうまくいった。
- ・ 課の Can-do に焦点を置き、後のものはカットしてもいいと考えられるようになった。

4. 考察

ケルン・シラバスの妥当性検証、講師間での教育実践の共有という観点から成果と今後の課題をまとめる。

4.1 成果

(1) ケルン・シラバスの妥当性検証

JF スタンドでは、言語使用は社会生活を組織している領域の中で行われるとし、CEFR の私的領域、公的領域、職業領域、教育領域の4つの領域という概念を重視している。今回、Can-do 目標がケルンの学習者にとって妥当かどうかを検証する際、この領域という観点があることが示唆された。日本で遭遇するような Can-do 目標は必要ないという意見がある一方で、日本で長期間生活する上での Can-do 目標は必要ないが、旅行者として遭遇するものは必要があるという意見も出た。その他、学習者の中には教室の中で日本を疑似体験することに意義を感じている人もいるという意見もあった。現実的に遭遇する可能性の高い領域と、それほど必要性は高くないが体験してみたい領域という観点から、ケルンの学習者の日本語使用領域を整理することで、シラバスを学習者のニーズにより近づけることが可能であろう。

(2) 講師間での教育実践の共有

ケルン講座では以前から、毎コース3回の講師会、授業記録の共有、自作教材の共有などを実践してきたため、これを通してチームティーチングを円滑にする土壌が自然に培われてきた。今回の取り組みでは、シラバスを担当講師以外の講師にも配布し、講師会議で全員で検討した。異なるレベルを担当する講師からのフィードバックは、自分のレベルを客観的に見る視点をもたらした様子であった。また新シラバス導入にともない、授業記録のフォーマットを統一したが、これにより他の講師と自分の授業実践を比較することが容易になるなどの利点があったようである。

4.2 チームティーチングのあり方

ケルン講座では、これまでもチームティーチングによる授業実践を実施してきたため、講師間のコミュニケーションは概ねよくとれていた。しかし以前のような文型中心のシラバスの場合は、文型を分担してしまえば、あとは各自で担当箇所を教えればよく、個人で教えるのとさほど大差はない。それに対し、Can-do 目標に基づく授業では、各講師がそれぞれ違う項目を教えるにしても、各項目が互いに密に関連しており、最終的に目指すところは同じ Can-do 目標を達成することであるから、これまで以上にチームで考え、決め、実行することが多くなったはずである。これは講師間の対話をより多く生み出すきっかけとなった。このことは結果として、ある講師がインタビューでも言及していたように、「授業に関して意見の相違が見られる時、それをどう相手に伝えればいいのか難しい」という新たな問題の発見につながったのである。2人のチームティーチングでは、意見の相違が生じた場合、相手に自分の考えを率直に伝えることが難しい場合が多い。こういった場合は、チームティーチング間で浮かび上がった問題点を講師全員の問題として共有し、グループの一人の意見として伝えるほうがスムーズに行くことが多い。

また、担当のレベルやクラスで生じた問題は、他のレベルを参考にしたりすることで解決することもある。毎コース3回行っている講師会議は、日頃あまり接点のない別のレベルの担当講師との意見交換や問題共有も目的の一つとしている。今回のシラバス作成はレベル1から5までを対象としたが、すべてのレベルの講師にシラバスを共有してもらい、

話し合いに参加してもらった。その結果、今まで見えていなかったことに対する気づきが促されるという効果があった。例えば、自分の担当レベルの Can-do 目標が中級の目標と有機的に関連していることを発見した講師がいる。また、自分の担当レベル以外の講師との話し合いによって、学習者の言語行動が自分の身の回りから、家族、友達、教室内の人との関わりを経て、次第に外の人との関わりへと広がっていくというイメージを描くことができた講師たちもいた。このような気づきは、自分の担当レベルだけを見ていただけでは決して生まれなかったであろう。

4.3 課題

今後、講座の改善を続けていく上で、次のような課題がある。

(1) シラバスの改訂

まず挙げられるのは、Can-do 目標の再検討である。4.1 (1) で述べたように、ケルンの学習者の言語行動を領域という視点からもう一度整理しなおす必要がある。

さらに、文字学習をどう Can-do 目標とすり合わせていくのかという問題も残っている。特に初級の漢字学習については、まずは体系的に教えるべきだという意見もあり、今後も議論を重ねていかねばならない。

また、評価法をどう変えるのかという問題も提起された。何を評価すべきなのか、そしてそれを評価するにはどういった方法が妥当なのかについて講師間で対話を続けていくべきであろう。

(2) 教師の協働環境の整備

今回、ケルン講座は教師の協働による講座改善の第一歩を踏み出した。その結果、各講師が自らの教育実践を内省し、内省した結果を共有し、講師間の対話が促進された。次なる課題はこの取り組みを一度で終わらせずコースの中に定着させ、継続的に行っていくことである。そのためには、教師の協働を可能にするような環境を日ごろから整備しておくことが必要である。まず、講師会議を引き続き定期的実施し、会議を単なる授業の引き継ぎだけでなく、日頃の問題点を共有したり、疑問点を話し合う場としても機能させることである。また、講師の授業記録や自作教材は講師の共有コンピュータに保存し、誰でもアクセスしたりアップデートできたりするようにしておく。これらは、自分が授業計画を立てたり、授業実践を内省したりするためのツールとして有効であろう。

どの講座であれ、その時々課題がある。その意味では講座の見直しに終わりはない。今後も講師間の協働を続け、将来的には中長期的な視野に立って講座改善を続けていきたい。

参考文献

- 国際交流基金（2009）『JF 日本語教育スタンダード試行版』
 <教材>
 加納千恵子他（1989）『基本漢字 500 Basic Kanji Book』
 スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語』